

福井支部ニュース

2025年度 第8号

日本科学者会議福井支部

連絡先：山本雅彦、masahiko@mbp.nifty.com

郵便振込口座番号 00710-9-17967 日本科学者会議福井支部

支部ホームページ <https://jsafukui.net/>

科学者会議本部 <http://www.jsa.gr.jp/>

今号の内容

- ◆報告 2025年度 JSA 福井支部第6回幹事会の概要 (山根 清志)
- ◆抗議 トランプは人間の命・人権を否定するのか
米・イスラエルのイラン武力攻撃を非難する (森 透)
- ◆抗議 トランプ米政権による無法なイラン攻撃を糾弾し、
即時中止を強く求める (山根 清志)
- ◆抗議 国際法を無視してイラン攻撃したイスラエルと米国、
それを「非難」しないG7等「先進」諸国に、強く抗議する(小倉 久和)

[報告] 2025年度 JSA 福井支部第6回幹事会の概要

2026年3月2日(月) 夕刻、予定より5分遅れの18:05から、オンライン方式で定例の第6回幹事会が開催された。

1. JSA 北陸地区シンポ2026 in 富山について、全体の輪郭が示された。

- ・主催：JSA 北陸地区 主管：富山支部
- ・メインテーマ：「廃棄物処分場を巡って」
- ・開催日時：2026年4月26日(日)13時30分～16時50分
- ・会場：富山県民会館611号室(対面およびオンライン)
- ・プログラム：

特別講演 杉本裕明さん(ジャーナリスト・元朝日新聞記者)

「いま、廃棄物処理場はどんな問題を抱えているのか—歴史的な変遷を振り返って—」

一般講演(1) 奥川光治さん(元・富山県立大学)

「庄川水源地の産廃処分場計画について」

一般講演(2) 新木順子さん(能登の里山里海を守る会)

「『輪島市門前町大釜産業廃棄物処分場』について」

一般講演(3) 山本雅彦さん(自然と環境を守る敦賀市民の会)

「敦賀市樫曲の産業廃棄物最終処分場について(仮)」

参加費：無料(どなたでも参加いただけます)

2. 例会について……積み残しなどの例会の具体化

(1) 樋口英明元裁判官の映画「原発をとめた裁判長」(小原浩靖監督)について、(2) 島崎邦彦氏の著書『3.11 大津波の対策を邪魔した男たち』について、は今回、議論せず。

(3) 「学問の自由とゆらぐ基盤」(JJS2025年9月号特集論文)などを参考に、福井支部内で学習会(例会)ができないか、について議論した。

・山根幹事からの提案内容を確認するとともに、例会の開催日程は3月末から4月中旬を考えたいが、土日で空いているのは4月19日(日)13:30～教育センター3F会議室、とのことで、事実上その日に決まった。

3. 第26回総合学術研究集会(26総学)についての案内

・主催：日本科学者会議

開催日：2026年9月5日(土)～9月27日(日)

9月5日(土)および6日(日)は岡山大学にて対面(ハイブリッド)開催

9月7日(月)以降は、オンライン開催のみ

・現在、分科会設置申し込み受付中(1st サークラー)

・原問研(委員長：山本雅彦)：B3 脱原発への課題と展望9/6(日)13:00～15:30を、第1希望として申請しているとのこと。

4. 『福井の科学者』特集号の件について

1月31日、能登研『福井の科学者』特集号の関係者で集まって相談する会議があったが、それに関わる報告。

- ・小野一幹事が福井支部幹事会決定を踏まえ、能登研の活動について、『福井の科学者』に特集号を組むことを提案。森透代表幹事や小野幹事から、福井支部の「能登研」例会での報告や、能登研の現地調査および民主団体でのボランティアの経験を、文書化することの提案があった。
- ・また、『福井の科学者』の編集委員会から執筆者への原稿依頼について話し合い、代表幹事の森透氏の名前を入れて依頼文を作成することになった。依頼文は、小野幹事が簡単な趣旨説明を含めて作成することになった。
- ・さらに、特集号の内容、原稿の依頼対象、発行形態について話し合われ、最終的に『福井の科学者』143号として5月に原稿を集めて、6月に発行することが決定された。
- ・但し、5月原稿集め、6月発行との予定に関しては、幹事会当日、高木編集委員長から7月発行でよいのではないかと心配する声が表明された。

5. JSA 第57回定期大会（オンライン開催）についての案内

第1日目：2026年5月30日（土）10時から17時

第2日目：2026年6月14日（日）10時から17時

- ・なお、大会代議員選出の必要があるため、5月30日までに支部大会を開いて決める必要あり。

6. JSA 福井支部第56回総会の日程と議案書（案）について

- ・総会議案書（案）の起草の分担。加筆は赤字、黒で見え消しする。
- ・総会の日程は5月某日。 場所：〇〇

7. 支部ニュースについて

支部ニュース第6号と、支部ニュース第7号がすでに発行されている。

8. 会員拡大と会計について

伊藤担当幹事より、会計状況報告（2026年3月2日）として、（1）現

在高、（2）会費納入状況、さらに、（3）会員拡大等、（4）今後の予定、について説明があった。

9. その他（イベント紹介）については下記を除いて省略

- ・3月8日（日）12：30～ 「3.11 さよなら原発福井県集会 in つるが」
メイン講師：樋口英明元裁判官 於：敦賀市きらめきみなと館
主催：同実行委員会

最後に森代表幹事の閉会の挨拶があり、19：50に会は終了した。参加幹事は7名であった。

（山根 清志）

支部ニュースへの寄稿・投稿を

支部ニュースを支部会員間の交流の場とするため、積極的な寄稿・投稿をお願いします。

- ◆ジャーナル評論：「日本の科学者」「福井の科学者」の評論
 - ◆時事評論・批評、意見・見解、訴え、広報など
 - ◆活動・経験報告、事例紹介、行事案内、会員への案内・お知らせ
- その他、エッセー、書評、文芸作品の紹介など、何でも支部ニュース担当者までメールでお送り下さい。 yamane@f-edu.u-fukui.ac.jp
ogura@u-fukui.ac.jp

2026年前期の会費納入をお願いします

2026年前期の会費納入をお願いします。また、過去の未納会費のある方は、分納でも構いませんので、至急納入をお願いします。

【抗議】 トランプは人間の命・人権を否定するのか

米・イスラエルのイラン武力攻撃を非難する 森 透

ロシアの突然のウクライナ侵攻から始まり、私たちは武力によって人間の命・人権を否定する行為を見つめてきた。武力・軍事力によって、国際法・国連憲章で保障されている「平和のルール」が根本から変更・修正されている現実を私たちは見て来た。今回の米国・イスラエルによるイラク進攻も同じである。たとえイラクが核保有という危険性を持ちあわせていても、一国の体制を「力・暴力」で否定することは許されない。どこまでもとことん「対話による平和外交」によって行うべきである。一番の被害者は、兵士はもちろん、一般の罪もない市民、特に女性や子供たちが被害にあっている。国連は緊急の安全保障理事会を開会したが、対立国の激論で一致点は生れない。人間は国家を背負うと、個人の思いは否定される。戦前の国際連盟や戦後の国際連合は世界の平和のために設置された機関であるが、現実的な平和機能が実現していない。トランプが一番恐れているのは支持率である。次の選挙に向けて市民にアピールして、アメリカファーストを掲げる。アメリカだけが世界の頂点を目指すトランプは、共和党全体の支持を受けているのか。トランプの暴走を止める共和党の政治家はいないのか。民主党は何をやっているのか。オバマ元大統領は今の世界の惨状をどのように見ているのか。トランプはオバマがやってきた民主的な政治体制を根本から否定している。気候変動はデマだ、とパリ協定から離脱する。世界的な気候変動による夏の猛暑・酷暑をトランプは否定するのか。地球がいまや人類の環境破壊によって破滅の道を進んでいるという現実を直視すべきである。世界の資本主義のシステムがこの地球破壊の根本原因であるにも関わらずである。

日本に目を向けよう。「朝日」3月3日「社説—予算審議と首相」を以下に引用する。「米国とイスラエルのイラン攻撃は国連憲章や国際法に違反しているとして、共産党の田村智子委員長が攻撃をやめるよう日本政府の働きかけを求めた」が、茂木外相が「情報を把握し切れていないので「法的評価は控える」などと答え、その後、首相がそれをなぞるといったやりとりが繰り返され

た」とある。米国との関係維持を望む政府の姿勢であり、今月の日米会談がどうなるのか。日本国民にとってどのような政治が強行されるのか。

私達は日常生活で他人に暴力を振るってはならないことは常識であり、平和な社会を望んでいる。それが国家対国家の政治レベルとなると、市民目線が否定される。このような今の社会、世界の情勢をどのようにとらえ、どのように変革したらよいのか。常に市民目線で平和・民主主義を訴えるしかない。社会を変えるのは、やはり市民である。

【抗議】 トランプ米政権による無法なイラン攻撃を糾弾し、

即時中止を強く求める

山根 清志

2月28日、米国とイスラエルは、イランに対する大規模な先制攻撃を開始した。この行為は、明らかに国連憲章と国際法を、乱暴に蹂躪してなされた先制攻撃であり、断固糾弾されなければならない。

しかも、トランプ大統領は、イラン政権を「巨大なテロ組織」と決めつけ、「大規模かつ継続的な作戦」を実施する、「イランの海軍を壊滅させる」と宣言し、他方、イラン国民に対して「自分たちの政府を乗っ取れ」として、体制転覆を公然と呼びかけている。

トランプ米政権がイスラエルとともに、イランの体制転覆を目的としてこのまま「大規模かつ継続的」な攻撃を行うならば、中東と世界の平和と安全に取り返しのつかない深刻な打撃をもたらすことになるのは必至である。トランプ米政権に対し、直ちに攻撃を中止し、交渉による解決に立ち戻ることを強く要求するものである。

また、米国はオマーンの仲介でイランと核問題での交渉中であつたにも拘わらず、交渉を中断・破壊する形で、一方的な武力行使をおこなった。そしてイランの最高指導者ハメネイ師を殺害した。交渉相手国のトップを先制攻撃で排除する——米軍が他国の最高指導者を直接殺害するという、ここまでの暴挙は、戦後のアメリカの歴史の中でも、かつて存在することのなかった程の無法さである。独立した他の主権国家の最高指導者を殺害する権利は、トランプ大

統領といえども有するはずがない。あまりに異常な国際法違反の暴挙に顫動せざるを得ない。満身の怒りを込めて強く非難する。



【抗議】国際法を無視してイラン攻撃したイスラエルと米国、それを「非難」しないG7等「先進」諸国に、強く抗議する

小倉 久和

イスラエル軍と米軍が、予告なくイラン全土への空爆を開始した。両国の、国際民主主義の理念を踏みにじる暴挙に、強く抗議する。

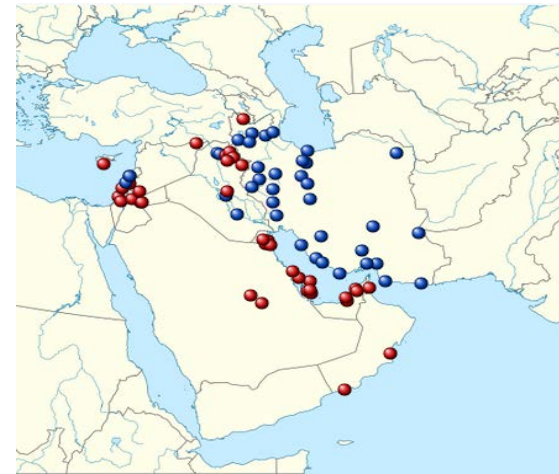
米・イラン協議について、仲介のオマーンが、2/26の協議で3/2に協議継続のための実務協議を開催することで合意という趣旨の発表をしたと2/27に報道された。その発表に米国政府は全く資料もコメントも出さず、また、協議破棄通告すらせずに、2/28に攻撃開始した。初日にはイラン南部の小学校が米軍の3発のミサイル攻撃を受け授業中の児童160人以上が殺害された、と複数の海外メディアが報じたが……。米国（CIA?）とイスラエル（モサド?）は何ヶ月も前（昨年?）から情報を収集・共有し標的を準備していたとか、イランが協議で油断しているときこそネタニヤフ氏がトランプ氏を説得した、などの報道もあった。国連安保理では多くの国から「国連憲章」や「国際法」等への違反を指摘されたが、イスラエル・米両国は一蹴した。トランプ氏は、2期目就任直後から「国際法は関係ない」「私の良心」に従う、などと発言したりしていて、国連はもとより、米国内の「議会」や「司法」すら眼中に無いように振る舞っている。この2月には、駐イスラエルのハッカビー米大使がインタビューへの応答で「イスラエルが中東の大部分を支配する権利がある」と発言し、中東の多くの国々から厳しく非難されていた。

イスラエルと米国によるこの国際民主主義破壊とともに、いわゆる「先進諸国」のG7の親米の各国、英・仏・独・伊・加、そして日本も、攻撃に参加こそしなかったが、イラン攻撃は非難せず、イランの報復攻撃には「国際法」に違反すると強く非難した。G7以外でもオーストラリアは今回のイラン攻撃を支持している。I OCは、ロシアのウクライナ侵略でロシアを非難し参加させなかったが、イスラエルのガザ虐殺ではイスラエルの参加を認めた。この「ダブルスタンダード」は、イスラエル・米国のイラン攻撃でも「健在」だ。スペ

インは、攻撃を批判し国内の米軍基地は使わせないと正論を訴えたため、トランプ氏は全面禁輸にすると恐喝している。

ところで、米軍の潜水艦が、戦闘海域でない公海のインド洋でインド海軍の演習に招請され参加していたイランのフリゲート艦を攻撃し撃沈した。国際法で公海上は「航行の自由」が認められていて船舶攻撃は禁止だが、米国はインド洋でも、カリブ海での船舶やタンカーへの攻撃と同様に、行動した。海難信号を受けたスリランカが救助に入ったが、インドは特には何もしなかったという。インドも、経済的圧力を掛けてくる米国に忖度した、のかも……。

国際法を無視してイラン攻撃したイスラエルと米国、それを「非難」できない「先進」諸国に、強く抗議する。



イスラエル・米国の「攻撃」地点(●)とイラン・他の「反撃」地点(●) (Wikipedia より)

《編集後記》

2025年度支部ニュース第8号をお届けします。

イスラエル・米国のイラン攻撃が始まり、いつ終結するのか全く見通せません。

ところで、千葉工業大学学長の伊藤穰一氏が、米国のマサチューセッツ工科大学（MIT）のメディアラボ所長時代にエプスタイン氏から巨額の融資を受けていて、エプスタインファイルにメールのやり取りや写真が多数残っていたことが報道されています。編集子は伊藤氏の業績の知識はほとんどありませんが、たとえ純粋に研究活動であったとしても、多くの人や金が集まり動くところではいろいろな思惑が錯綜する、ということを感じます。アインシュタインがイスラエル建国への参画の誘いを断った慧眼を思い出します。

（OG）